

ユニバーサルデザイン WG 報告：ML 上の議論から

ユニバーサルデザイン WG (代表 嶺重 慎)

2006 年 8 月に発足したユニバーサルデザイン WG(UDWG)は主としてメーリングリスト(ML)を使って、意見や情報交換をしています。どのようなメールが行き交っているのか、WG メンバー外にご紹介するため、その中からいくつかかいつまんでご紹介します。

The universal-design working group (UDWG) of Tenkyo was established in August, 2006. Since then the WG members exchange their thoughts and information by using the mailing list (ML). Here, we pick up some of them to introduce our activities to those who are not familiar with the UDWG.

1. はじめに

2006 年 8 月に発足したユニバーサルデザイン WG (UDWG)では、メンバーのさまざまな思いや情報をメーリングリスト(ML)を用いて共有しています。その数は、2007 年 7 月末で既に 600 通弱にも及びますが、その内容は必ずしも会員外の方には明らかではありません。そこで、その一端を紹介します。

なお、いくつかのセッションに分け副題をつけましたが、これは便宜上つけたものです。また、以下の文章中、<<...>>は他メールからの引用を、...は中略をそれぞれ表します。なお「しょうがい」ということばは、ひらがな表記に統一しました。また全体を短くするために、メールの表現の一部を省略した箇所があります。

2. 盲学校を訪問して

伊藤哲也(国立天文台)

都立八王子盲学校で授業公開をやるというので見学に。初めての経験だったためいろいろと新鮮な発見がありました。たとえば、

- ・弱視から全盲まで生徒さんのしょうがいの状態にいろいろなバリエーションがある。
- ・教員数が一般の学校のイメージよりもかなり多く一人ひとりの状態に対応したきめ細かい、指導が行われている。
- ・理科では自作も含めたさまざまな工夫され

た実験器具がある。

見せていただいた中には洋書で視覚しょうがい者向けの天文の本もありました。英語の点字の本であり、内容もかなり高度ということもあり、説明はわかっている人間がしなくてはいけないのですが、それでもとても役に立ちそうです。ただ、天文の話がどれだけ生徒に実感を伴って伝わるものなのか、というのが興味深いところでした。実感太陽系などいろいろと工夫した実践もされているということを以前うかがっており、それは大変有効だろうと感じました。…先生方のご苦勞も大変だとは思いますが、できるだけ充実してほしいし、また、こうしたしょうがい者への理解をさらに進めると共に、もしできることなら、なにかできることから協力したいとつよく思わせるものがありました。

(2006.11.3)

3. 天文遊具について

加藤わかな(千葉大)

現在私は修士の研究で、生涯学習を前提とした視覚しょうがい者の学習を支援することを目的に、ハード面のデザインの可能性を探っています。学部では、視覚しょうがい児の遊具に関する研究を行っており、引き続き学習に視点を置いて研究を進めています。

(2006.12.19)

臼田佐藤功美子（国立天文台・ハワイ）

視覚しょうがい児の遊具ですか。面白いです
ねー!! 是非、具体例をご紹介いただければ
と思います。(2006.12.20)

加藤わかな

実はデザインはしたのですが、技術とコスト
の関係上モデルをつくれなかったため、あ
くまで提案の形になっています。遊具の研究
はとても面白かったです。視覚しょうがいと
言うと弱視も含まれるので見た目はきれい
ですし、何より彼らの遊び方が面白いんです。
好きな遊びが自転車って子供もいましたか
ら。(2007.1.9)

嶺重 慎（京都大）

前に、視覚しょうがい者と話をしたとき、
立体的な感覚を視覚を用いずに伝えるのは難
しいので、例えば、太陽系のさわれる模型(動
くもの！)とかあれば、理解に役立つといわ
れたことを思い出しました。...

視覚しょうがい者専用グッズではなく、晴
眼者も見て触って楽しめる、いや、今までと
違った感覚を発見して新鮮な驚きを感じる、
といったものができればいいですね。例えば、
カラー画像を点字の点でなぞったものなど。
多くの方はここで目をつぶって指で形をたど
ることでしょう。(2007.1.11)

臼田佐藤 功美子

私も、視覚しょうがい児用遊具にとっても興
味があり、具体例を知りたいです。...

子供の延長で考えるとすると...子供向けグ
ッズで一番安直に思いつくのが塗り絵とパズ
ルですが、指で触ってわかるような凸凹をつ
けたパズルを作ると「視力」に関わらず誰
でも遊べるかもしれませんね。例えば (M51
のような grand design の) 渦巻き銀河の腕と
バルジを木工用ボンドなどでなぞって膨らみ

をつけた後でマス目に切り、銀河パズルとか。
(研究者・学芸員側も、銀河の腕をボンドで
なぞっているうちに、銀河構造に関する新た
な発見があるかも(笑)??)(2007.1.12)

嶺重 慎

凹凸パズルっというのはおもしろい
ですね。たとえば、個々のピースの形が同じ(正
方形)でも、凹凸がスムーズにつながるよ
うに並べるだけでも楽しめそうです。(2007.1.12)

高橋 淳（茨城県自然博物館：当時）

おもしろい!! 例えばこういうのはどう?
【トレーディングカード風パズル】
・1ピースは名刺サイズで、10枚1セット
・カード表面には、天体写真の絵(立体加工)
:10枚(ちょうど A4 サイズの名刺カード用
プリンタ用紙のように)並べるとひとつの絵
になる。
・裏面には、天体の諸定数や解説など(晴
眼用文字の上に、点字)
(裏面ではなくて、かるたの読み札のよ
うに別カードとして分けても良いかも...)

臼田佐藤功美子

ふと思ったのですが、(天文学・自然科学
の分野に限らず) 視覚しょうがい者と晴眼者
を混ぜたイベント、特にハンズオンを行う時、
視覚しょうがい者と晴眼者がペアになってお
互いを補いあいながら作業するようなイベ
ントってどこかで行われているのでしょうか?
(2007.1.13)

4 . 山梨での取り組み

高橋真理子

先週末、プラネの新しい番組がはじまり
ました。「星月夜～めぐる大地のうた」とい
うタイトルです。この番組に副音声をつけ
ようと思っていて、この番組のプレスリ
リースの

際に、こちらの星の語り部のメンバーで全盲の市瀬さんや、そのお友達で、テレビの副音声モニターなどもされている方（この方も全盲）やそのヘルパーの方、さらに青い鳥奉仕団といって、音訳や点訳のボランティアをしているグループの方が6名もいらして、番組をみてもらったあとに、いろいろと意見交換をしました。

今回の番組は特に、音楽がテーマと情景にあっている美しい音楽なので、ちょっと一言、今何がしているのかを伝えてあげるだけでも、きっと「オーロラが空いっぱいひろがっているかんじ」とか、「満天の星」とか、「宇宙を感じる」手助けができるのでは、と思っています。実際に、彼らの意見を聞くとそうかな、と思うことができました。

また、「点字技能師」をやっている方々が「点図」（点で描いた説明図）なるものを持ってきてくださり、星の解説にあわせて、星座などを点図であらわしたらどうだろう、と熱く提案してくださいました。

星座や星図で、こういう手法でつくられたものはこれまでにあるでしょうか？...

その点訳の方がおっしゃるには、ドームの構造についても点図で伝えて、今自分が座っているのはこういうところ、と伝えられるといいな、と。そして今見えている星がこうでその点を結びとこんな形というのを、耳できくのと点図をなぞりながら一緒にできればいいなと。・・・ゆくゆく、臼田佐藤さんのおっしゃるような<<視覚しょうがい者と晴眼者を混ぜたイベント、特にハンズオンを行う時、視覚しょうがい者と晴眼者がペアになってお互いを補いあいながら作業するようなイベント>>というのも企画できるといいなあ、と思いました。(2007.1.15)

臼田佐藤 功美子

<<星座や星図で、こういう手法でつくられ

たものはこれまでにあるでしょうか？>>

アメリカのものですが、去年の9月、ASP conference を見てきたものをご紹介いたしましたが、その中に SEE project の方が作られた視覚しょうがいがある方用の星座早見盤、月の満ち欠けモデル、変光星観測モデルがありました。おそらく「点図」に通ずるものがあると思います。

(http://analyzer.depaul.edu/SEE_Project)

<<せいぜい星座を点図にするくらいで「満点の星」「宇宙を感じる」までは、まるで頭にありませんでした。すばらしい発想です。>>

私は嶺重さんのこの文章を読んでほっとしました。...自分の「目」で一度も本物の星空を見たことがなくても、(もちろん)満点の星空や宇宙を感じるができる。もしかしたら彼らが思い描く星空や宇宙は、私達が思い描くものとは異なるかもしれないけど、「星空」「宇宙」という言葉・描像を共有できるのだ、と。(もし違うのであれば、どのように違うかも、コミュニケーションで伝えあうことができるし。)そう考えると、とてもわくわくしてきました。外国で新しい言語と文化に出逢う時のわくわくに似ています。...

ここからは、半分愚痴になってしまうのですが...どうも日本では、「健常者」としょうがいを持つ方との重なりが少ないですよね...。こちら(ハワイ)では、(晴眼者ではありませんが)車いすにのったお年寄りや、片腕あるいは両足を喪失された方などが当たり前で町中に(1人で)出て、買い物を楽しんでおられます。そういう方のために(嫌味な感じなく)道をあける、ドアをあけるということも、かなり自然に行われているように思えます。...

それで1つ思いつくのは、日本ではまだまだ町中でしょうがいを持つ方が当たり前で生活する(買い物する・バスにのるなど)状態になっていないのが原因かなあ、ということ

です。このあたりのことになってくると、精神論や社会性も絡んできて、この WG でどうこうという範疇ではなくなってくるかもしれません。ですが、この WG の趣旨でもある「共に歩む」をせめて我々の力の及ぶ自然科学の分野で実現できないかなあ、と思う次第です。(2007.1.16)

高橋真理子

先日、番組をごらんいただくためにおいでいただいた全盲の方と話をしていたら、「私はこういう点図というものにはほとんどなれていないんです」とおっしゃっていました。生まれながらの視覚しょうがいの方は、「俯瞰する」という行為がとても難しいのだということをお話をしているととても感じます。「地図も昔ならったけれど、私はほとんど理解ができない」とおっしゃっていました。基本的に、彼らにとって、世界への理解は自分からの距離という感覚で捕らえるのが普通なのだと思います。なので急に太陽系や銀河系の俯瞰図が出てとても非常に捕らえにくいのかな、と。(2007.1.19)

5 . 八王子盲学校での取り組み

柴田直人(八王子盲学校)

視覚しょうがい遊具について話題が出ていました。実際には作られなかったようですが、盲学校で働く身としては、興味があります！

ユニバーサルデザイン遊具として、白と黒が手触りで分かるオセロ(枠が出っばっている)や将棋、囲碁、点字のついた UNO、トランプ、BINGO などあります。他にもたくさんありますが、省略。...

実際にさわれる物や体験できるものが理解を深めます。そうはいつても、実際に宇宙に行くわけにはいかないの、100億分の1に縮小したわけですが、それでも子ども達の太

陽系や惑星への認識は、ぐっと深まったと思います。...

空間概念をいかに理解するかが、全盲の方にとって大変なことです。先天盲の方は、小さい頃からまず自分を基点として前後左右上下を理解し、その後、基点を他者に移し、同様に理解していく...。それがだんだんと広がり、家の中の部屋の配置、学校の中の教室の配置とつながり、上の階、下の階など平面から立体へと広げていくわけです。つまり、ぱっと「見て」空間を理解することが難しい全盲の方々は、そうやって小さい頃から理解を積み重ねていかなければいけません。

なお、中途視覚しょうがい者は、視経験があるので先天盲の方よりも空間概念はしっかりしています。

<<星座や星図で、こういう手法でつくられたものはこれまでにあるでしょうか?>>

点図付きの星座絵の1年間卓上カレンダーが、数年前に日本ライトハウス?だったかから発売されて、私使っていました。

[この星座絵の卓上カレンダーは、社会福祉法人 視覚障害者支援総合センターから発行された2005年チャレンジ点図カレンダーだと思います。紺色の紙に星の部分に銀色のインクが乗っていました(小宮美砂子)]

ついでに、点字教科書も参考にされると良いですね。文科省の検定済理科教科書は、全盲生向けに点字教科書が作られています。文科省が著作し、その編集には盲学校教員が携わります。(私もやりましたがえらく大変な仕事です。)天体の単元では、はくちょう座などを点図にしましたので、こちらについてもご覧になると良いかと思います。

(2007.1.31)

6 . カラーバリアフリー

古荘玲子(早稲田大)

私が参考にしてきたサイトのURLです。

・色盲の人にもわかるバリアフリープレゼンテーション法 (<http://www.nig.ac.jp/color/>)

ご自身も「色盲()」である研究者による活動から生まれたサイトです。(サイトオーナーがこの言葉を選んでいらっしゃるようですので、ここでは「色盲」と書きました。)「プレゼン」の資料(「本編」)等、私にはとても参考になりました。このサイトで既に「ユニバーサルデザインにおける色覚バリアフリーへの提言」などが公開されています。見え方をチェックできるシミュレーションソフト(Vischeck)もここで知りました。

・ぱすてる 色覚問題研究グループ

(<http://www.pastel.gr.jp/>)

当事者にとってどんな問題が起きているのかを知る際には、こちらのサイトも大変参考になると思います。

確かに「色盲・色弱」という言葉は忌避されています。その代わりに「色覚異常」もしくは「色覚特性」という言葉が使われます。ただ、人によっては「色覚“異常”」という言葉の方が問題として、「色盲・色弱」を選ぶ方もいらっしゃいます。

<<黒板に赤いチョーク(パワーポイントでも黒いバックグラウンドに赤字)は見にくいので使ってはいけません。>>

この他、よく出てくる例としては

・緑色レーザーポインタの方が(赤色のものより)明るく見やすい。

・家電やPCなどのサインにはLEDの色変化だけでなく複数点灯や点滅といったサインの組み合わせでないと判別できない。

・色別けしたグラフを作る場合は、キャプションに“この色はこれ”という表記のみではなく、線や矢印でどの線(どの部分)が何かを明示する。

カラーバリアフリーの視点というのは、ユニバーサルデザインを考える上で重要な要素の一つとなると思います。どうすれば良いか

といった検討や提言の先行例はたくさんあるのですが、それを『知らない』というのが一番の問題点かな、と私は感じています。

WGの作業としては、大きく分けて

・天文の教育普及をする際に、どんな留意点があるか。たとえば、講演会などにおけるプレゼンテーションにおいて。

・科学館やプラネタリウム等の施設においてユニバーサルデザインを推し進める際に、どんな留意点があるか。

といった事を纏めることでしょうか。

(2007.3.30)

7. 天文教育普及で伝えるもの

嶺重 慎

先日、京都盲学校を訪問して考えさせられたことは、一体、われわれは、天文教育普及で何を伝えるのかという根本的なこと。・・・

この質問の答えは一つではないと思います。ひとつ思い出すのは、前に有本さん、高橋さんと書いた岩波ジュニア新書「天文学入門」の執筆方針を決めるとき、さんざん議論したこと。特に、西はりまの黒田さんには多くを教えて頂きました。つきつめると、私たちは宇宙とつながっているということ、空間だけでなく、時間の流れにおいても、地球や私たちのからだを構成する物質の起源においても、全て宇宙とつながっていること。そして、私たちは、地球という、宇宙の中では希少な環境の中で育まれてきた。このことを知る(学ぶ)ことは、まさに自分を理解することになる。

ほかにもいろいろな答えがあると思います。それぞれ、思うところがある方は、自由にMLになげて下さい。(2007.4.9)

高橋真理子

晴眼者がみているものを「共有したい」というのが彼ら(視覚しょうがい者)の願いの

一つでもあると感じています。

嶺重さんが書かれていることは、私もほぼ同じようなことを感じて日々自分の仕事をやっています。宇宙を知る大きな意義は、自分を知ることだと。自分がどんな世界に生きていて、どこからやってきてどこへ向かうのか...これは誰もが一度は疑問に思い、そして知りたいことなのだと思います。こと、視覚情報のない人たちは、自分たちの世界...を俯瞰するのが難しい。だからこそ、ますます宇宙の存在を知る必要があるのだ、と思います。

プラネタリウムは彼らにとってもほんとうに格好の「宇宙と自分をつなげる」いい場所であると確信していますが、ここで単なる解説や番組だけではやっぱりだめで、その中にいかにコミュニケーションがあり、また彼らの持つ世界を再び、宇宙へ戻していくのが、そんなことが大事、と感じます。

以前紹介したどうか・・・忘れてしまいましたが、うちの「星の語り部」メンバーで全盲の男性（市瀬實さん）が書いた詩、これは私たちの活動の支えにもなっています。

今夜僕は散歩にでかける

今日は星がでているだろうか

そう思うだけで心が暖かくなる（2007.4.9）

尾崎勝彦

嶺重さんや高橋さんが仰られるところは本当に大切だと思います。これは何も天文教育、理科教育においてのみ大切なのではなく、人間にとって共通に等しく大切なことだと思います。心に問題を抱える多くの人が「居場所のなさ感」を訴えますが、これなどは人間としての究極の居場所の獲得でしょう。そうなれば、人生の有意味感にもつながってくるでしょう。言い換えれば天文教育や理科教育は人間教育の核心部分を担っているとも言えます（言い過ぎ？）。（2007.4.10）

伊藤哲也

山梨県立科学館のボランティア「星の語り部」にも関わっています。・・・私はそこで初めて視覚しょうがいの方と友人となりました。その一人、市瀬實さんに、どうして「星の語り部」に参加されたのか伺ったところ、「ここに来るまで誰も僕に宇宙の話をしてくれる人がいなかったんだ。」

とおっしゃっていたのが大変印象に残っています。...やはり実際に触れ合い話し合う機会がないと、具体的にどうしたらいいかという案もなかなか浮かんでこないな、と思っています。（2007.4.16）

藤原晴美（ハーモニーアイ）

盲学校と視覚しょうがい者と天文学...。私が過ごしてきた環境は、「誰も宇宙の話聞いてくれなかった」でした。先に私が<<ずいぶん世の中が変わって来ているな。JAXAで視覚しょうがいの方が働いていらっしゃる。また、恒星社から加藤先生のバリアフリー版の本が出版されましたし...>>と書いたのも、そのころの記憶があるからです。（2007.4.17）

8．三次元情報と聴覚情報

篠原秀雄（埼玉・蕨高校）

年会の時に受け取った点訳本（Touch The Universe）を、時々眺めています。この間、車で職場に行ったときの帰りに、本を助手席に置いて、信号待ちのたびにページを触ってみました。夜で車内が暗く、目に頼らないで読み取るのにちょうどよかったのです。で、どうだったかというと、その図を読み取るのは、ほとんどダメでした。

家に帰って、絵で描かれているのを眺めながら、次のようなことを思いました。

人間の視覚というのは、結局のところ二次元情報しか見ていないのですよね。例えば技

術科でやる三面図から立体の三次元情報を想起するように、網膜に写る二次元情報から三次元情報を頭の中で作りだしています。

・・・以前、距離感とか俯瞰するといったことが難しい、というお話を伺いました。... そもそも「点図として表す」ということ自体が、視覚を持っている人の発想なのかも知れない、という気がしました。

それよりも、例えば音声（そしてそこで使うべき言葉）によっていかにそれを表現するか、ということの方が重要なのかなというようにも感じています。つまり、視覚を点図でフォローするのではなく、聴覚をもっと有効に活用する方向がよいのではないかということです。(2007.4.23)

高橋 淳（茨城・水海道一高）

音声の使用は、使い方を十分に考えれば効果があると思います。しかし、音声も欠点があって、斜め読みや逆戻りがしにくいという難点もあります。また中途失明かそうでないかによって、言葉の表現のしかたが異なってきます。そういう意味では、点図や立体模型・音声等の使い方を十分に吟味し、複合的に使うことがよいかもかもしれません。(2007.4.23)

藤原晴美

<<晴眼用の図を立体の点や線で表しただけでは、だめなんですよ。>>（高橋 J）

おっしゃるとおりです。これは一般論ですが、元の図中の何を残して触知図化するか、はっきり言えば、何を捨てるかが大切です。提供する側は、できるだけ原図に忠実に伝えたいと思うし、受け取る側も正確な情報を得たいと思います。その結果、一つの図の中の情報が多すぎて、触覚では全くわからないものになってしまう訳です。何を削って何を残すか、この"センス"が難しいのです。...

それと...同じ二次元図を提示しても、そこ

から得る情報や印象は、人によって全く違うという可能性もあるということです。当事者の視覚体験の有無やその長短に依存することは想像していただけたと思いますが、私の経験から、図のような物から得る情報の"個人差"は、そのような単純なものに起因するだけではないと思っています。(2007.4.24)

篠原秀雄

このところ考えていたのは、視覚を持っている人も持っていない人も、一緒に楽しむことができる本がいいなということでした。...

ちょっと思いついたのが「暗闇で読む星の絵本」。視覚を持っている人も、あえて暗闇で絵本を触って楽しむ。(ダイアログ・イン・ザ・ダークのマネですね。)ただ、点字を読むことはできないでしょうから、マルチメディア版ということで、CD による朗読もあり。イメージとしては、夜、部屋の電灯を消して、CD で朗読を流しながら絵本を触って、頭の中でイメージを描いて楽しむ、といった感じです。もちろん、画像を光の元で目で見ても美しいものにしておく...なんてことを、ちょっと時間があるときなどに考えていました。(2007.5.9)

柴田直人

私も星が好きで、高校時代は天文部で随分と夜空を眺め、星の美しさ(視覚的な美しさ)を感じてきました。ただ、全盲の方に、その視覚的な美しさはどうやっても伝わらない部分があるのかなと思います。言葉の表現や、触れる模型や、音楽的な要素でその美しさをどうにか表現し、伝えられないかなあと思うのですが。。星からの電波を音にする、とか?? (2007.5.10)

仲野 誠（大分大）

<<星からの電波を音にする、とか??>>

これから、こんなサイトがあったのを思い出しました。スプートニク、木星、ブラックホール、パルサー、ビッグバンなどからの信号を音にしたものを聞くことができますよ。

<http://spacesounds.com/navigator/index.html>
いろんな想像ができて、晴眼者にも面白いです。(2007.5.10)

塚田 健(東京学芸大)

2年くらい前でしょうか。天文台とスペースアートをやられている小野綾子さんらCSA(スペースアート会議)との連携で、"Star of Sonance"(響きの星)というイベントが行われたことがあります。天体のスペクトルを音に変換して聞いていくもので、真っ暗な部屋を音のみで宇宙を表現していました。

このイベントはアートとして行われたものですが、柴田さんもかかっているように、全盲の方に伝えられる一助になるのではないかなと思います。(2007.5.10)

9. 点図の星座早見版

藤原晴美

<<点図の星座早見盤はシンプルで、明るい星しか載っていませんよね。みんながみんな、マウナケア山頂で星を見るわけではないのだし(笑)、東京の夜空を見るのだったら、晴眼者でもそのくらいの星の数で十分だという気がします。しかも、星座を習いたての子供には、シンプルな早見盤の方がかえってわかりやすいかもしれません。>>(臼田佐藤)

点図の星座早見盤があったらいいですね。私も欲しいです。...

もし点図の星座早見盤を作るとしたら、思いつきシンプルにすることです。例えば、銀河だけのもの、明るい星だけを描いた星座だけ(せいぜい二つが三つまでにしておく)のものなどです。携帯性や触覚でもわかるようにという条件を考えると、それで精いっぱい

いなような気がします。

<<もちろん、星は時間とともに動いてもパターン自体は変わらないとか、1日4分ずつ出てくるのが早くなるとか、そういう内容の学習には早見盤は役に立ちますが、悪く言うとわくわく感がないように思えます。>>

少し厳しいかも知れませんが...。星空を全く見たことのない人に、上記のようなことを星座早見盤で伝えるのは(たぶん)無理です。そもそも...、私はずっと前星座早見盤の説明をしたとき、「どうして星空が楕円形なの?」という質問を貰って、答につまった経験があります。(2007.5.11)

高橋真理子

こちらでは番組副音声とあわせて、星空解説のときの星図の点図を、点字技能師の方と視覚しょうがいの方のご意見とあわせ試行錯誤しつつつくっています。早見盤は難しいので、まずは、毎月かわっていく星空紹介に追っていきけるようなものをつくってます。

最初、南正面して西から東まではいった星の3等星までのもの(甲府の空という前提)、6等星まで入ったものが2枚続いています。とりあえず今は点字(点字プリンター)であらわす点図なので、点の大きさが限られていて、6等星のものはそれだけでもういっぱい埋め尽くされて、ただ「たくさんある」というのがわかる、というもの。とても天の川は表現できません。

星座を説明できるように、主要な星だけにして線をまた別の小さな点で結ぶ点線で表したものを最初につくっていましたが、東から西まではいる広範なものは、どうしてもごちゃごちゃして、「こりゃわからん!」といわれました(笑)。

で、改良版として、なるべく星座解説の順番どおりに、ひとつひとつの星座を結構大きく表現して、1ページずつわけてやったもの

が今月バージョンとなりました。明るい惑星や1等星はいくつかの点をあわせて大きく表現したりもしています。点線と星の点の使い分けや、すぐ横に文字で名称をかいてもどこをさしているのかよくわからない、とか結構課題はたくさんあり。これ、まだ体験してもらってないので、来週あたりに体験してもらおうと思っています。(2007.5.11)

藤原晴美

やはり、ポイントは意図を伝えることができる"可能な限り少ない情報量"だと思います。実際に拝見していないのでちょっとずれているかも知れませんが。

・星とその名前(略して記すことも多いでしょう。)だけのもの。

・星とそれを結ぶ線だけのもの。

・(必要があれば)星座の絵姿だけのもの。

を1セットにするなども、方法の一つだと思います。(2007.5.12)

10. 板橋での取り組み

小野夏子(板橋区立教育科学館 / NPO 法人 ころプラネット)

<<板橋で、字幕投影をやっていたのではなかったか、という話を聞きました。実際どうなのでしょう。>>

経緯

板橋区立教育科学館でもかつて字幕投影をやっていました。確か、1991年くらいから年に1回のペースで行っていたと思います。これは、「聴覚しょうがい児を持つ親の会」というグループの依頼で行っていたものです。…補聴器に電波を飛ばして「難聴者により聞きやすい音声を届ける」という工夫もしていました。…しかし、企画を立ち上げた人間が退職するなどしてテンションが下がった頃にグループの方の予算がなくなり、何年も実施されていません。

投影配慮

頻度(季節)

年に一回ですので、最初の依頼では「夏に星を見に出かける予習に」という話であったかと思いますが、他の季節の星も見てもらおうという話になり、毎年1回、先の年とは別の季節に実施していました。

磁気ループ

最近では常設される施設もあるようですね。板橋での企画の時には、グループから依頼されてきた業者が投影前にドーム内にケーブルを張り巡らせていました。

BGMは使わない

また、「BGMと解説を重ねると言葉が聞き取りにくくなる」という事でしたので、日没のときなど、音楽はかけましたが、解説する時にはBGMはナシにしました。

字幕

職員が、モノクロの字幕スライドを焼き(当時はパワーポイントとか使える環境になかった)対応していました。「ゴシック体の方が見やすい」「あまり長い文章はダメ」など試行錯誤でした。

番組内容

その投影のためにオリジナル番組として用意したときもありますし、別の機会に上映した「特別投影」を改変したり、業者の作ったオート番組に字幕を入れたこともあります。

プリントの用意

どんな話をするかをより詳しく書いたプリントを用意し配布しました。オート番組の時には、番組のメーカーである五藤光学に了解をとって、脚本をそのまま印刷して渡していたと思います。

集客

最初は、「聴覚しょうがい児を持つ親の会」のみでした。後に広報等で周知しましたが、実際、それで来館された方はほとんどいません。

特記感想

単に「聴覚しょうがい者」ではなく「難聴の子供たち」が対象の企画でした。親の気持ちとして「子供たちの聞く能力を衰えさせたくない。目から情報を入れれば、聞かなくても済んでしまうということではなく、より聞き取りやすくして聴く練習をして欲しい。」という意向が強く、そのこともあって手話は使いませんでした。(2007.5.11)

11. 点字つき絵本について

嶺重 慎

5月15日に参加した「点字つき絵本の出版と普及を考える会」について、簡単に報告します。出席は約30人、多くは点字つき絵本に関わっておられる、あるいは将来的に関わりたいと希望している出版社の方でした。

印象的な議論を2つ。販売について。小学館のトーマスとドラエモンが、予想外に販売がのびていないことが報告されました。制作については、今後、材料・材質の研究を進めていく必要があるということ。

「点字つき・さわる絵本展 開催地募集」という話もありました。「ふれあい文庫」が所蔵する56冊の本(日本で手にはいる触る絵本)を、図書館、学校などに貸して、そこに集まった人に、直接手に触れてもらい、理解を深めてもらうという趣旨でしたが、お金がかかるのがネック。(主催者の)岩田さんは、実費、1万円の企画手数料を地元主催者から頂かないとやっていけないと提案されていました。(2007.5.17)

藤原晴美

「点字」に反応してしまいました。

<<「little raised bumps off a paper」：点字のことなんですね。>>(高橋J)

<<「点字：Braille」という「かたい」言葉を避けて、あえて子ども向けのやわらかい言葉

を選んだのだと思います。和訳すると、「紙の上の小さなでっぱりもりあがり」といったところでしょうか?>>(臼田-佐藤)

子供の目線に立った、優しく暖かい表現だなと思いました。日本語にはあまりない"言い方"ですね。ちょっと羨ましいです。

<<ちなみに、「Braille」は、点字の発案者が語源とのこと。Louis Braille ですね。>>

私たちは伝統的(?)に ブライユ と呼んでいます。点字はほとんどの国で、Braille を基にした言い方で呼ばれています。小惑星9969番(1992年発見)に、Braille の名が付いているのは嬉しいです。(2007.5.18)

尾崎勝彦(大阪大)

<<私達を作る予定の本の目的は、晴眼者「も」一緒に楽しめる本ですよ?晴眼者は視覚から得られる情報に大きく依存しているため、触覚から情報を得る楽しさを知らないと思います。>>(臼田-佐藤)

これは、とても大切だと思います。情報の80%以上が視覚から入ってくるとされていますが、現代人は視覚情報に頼りすぎていて、触覚情報を殆ど取り入れていなくて心のバランスを失っているという説もあります。…傷口など痛いところに圧力を加えると、そこからの触覚信号が痛み低減に働くという理論から発想されたらしいのですが。心のバランスを失ったひとが焼き物を始めたり、エステが流行ったりするのは触覚情報によって癒されようとしているというような話だったと思います。…とすれば、この本は晴眼者「も」楽しめるどころか晴眼者の方により役立つような本になっちゃったりして、なんてことを思いました。(2007.5.19)

12. ホスピス・病院訪問

尾崎勝彦

姫路聖マリア病院ホスピス病棟で、非医療

ケア(スピリチュアルケア)の責任者の部長と半年ほど前に世間話的に観望会について話したことはあります。私は、星の話をするときに、何万光年先の今出た光が...というような話になると、自分は絶対既に死んでいて存在しないことが大前提になるが、死が身近にある患者さんによっては辛く感じる方もあるのではないかとということが多少心配であることも話しました。...私的には、「行事です!」という顔をしているよりも、時々(月1回程度)ガーデンに望遠鏡があって、星のことを説明してくれる人がいるというような状況の方がいいのではないかと思います。

ホスピスでの患者さんへの接し方は基本的に普通の患者さんと変わりませんが、決定的に異なることは、基本的に失敗すればリカバリーショットが打てないということで、本当に厳格な一期一会になるということです。...

私は星を見るということは、本質的には命を見つめざるを得ないという怖さを含んでいると思います。...太陽や地球の運命(何年後にどのようになっている)についての知識が普通の人に比べて、量的にも質的にも圧倒的である天文学者、地質学者がどのような死生観を抱いているのか、を自分の研究として調べてみたいとも思っています。(2007.6.23)

嶺重 慎

ホスピスの話題をありがとうございます。...それから一期一会ということ、今まではっきりと言ってはいませんが、東京医科歯科や京大など大きな病院の小児科病棟ともなると、かなり深刻な状況(即ち命にかかわる病気)の子どももいます。ただ、だからといって緊張したり特別なことをしたりするのではなく(心をこめることは大事ですが)、ともに楽しいときを過ごせればいいな、という思いでしています。(というか、それくらいしか、われわれにはできません。)(2007.6.23)

犬飼岳史(山梨大学医学部小児科)

この ML に入れていただいたばかりですが、病院関係者という事でコメントさせていただきます。

私は大学病院で、いわゆる小児がんの診療を専門にしています。今では、多くの小児がんの患者さんが病気を克服して社会復帰しています。例えば、小児がんが一番多い白血病では、8割以上の患者さんが治癒しています。しかし、残念ながら全ての患者さんに治癒が得られる訳ではなく担当の患者さんが残念ながら亡くなられるという現実と向かい合うに立場にあります。

大学病院の小児科という特殊性もあり、私たちは最後まで治癒の可能性を追求しつつその一方で、患者さんやご家族にとって少しでも有意義な時間が持てるようにしたいとある意味で相反するミッションを持って試行錯誤しているのが現状でして、患者さんの心理状況について何かコメントできるようなものは持ち合わせておりません。...

ですから、月並みな内容ですが個人的に感じていることを書かせていただきます。

入院中の患者さんにとって、自分が閉ざされた空間にあるということが一番つらいと思います。その意味で、ボランティアの方によって病棟で観望会が行なわれる意義は大きいと思います。

ひとつは、医師や看護師以外の方と関わりが持てることで、たとえ入院していても自分が社会と繋がっていることが実感できることです。その場合は、病気とは無関係に、健康な時と同様の関わりがある方が自然だと思われるます。ですから、嶺重さんのご経験に裏打ちされたコメントに、私個人の意見も全く同様です。

その中では患者さんが星空を見上げて、例えば「人は死んだら星になるのだろうか?」というような事を口にする可能性はあるかと

思います。その場合にどんな受け方をするかは準備しておいていいのかも知れませんが、あくまで普通の方とその話題について語るのと同じでいいと思います。

閉ざされた空間から解き放たれるという事でいえば、星空は完全に開けた空間ですので、その意味も大きいと思います。ハワイ観測所の林さんが病棟の子供たちに星空のお話をして下さった翌朝に小学校低学年の女の子が「昨夜は消灯されてから病棟の窓から星をみたよ。病院の上にある星空は、世界中と繋がっているんだよね。ハワイとだってつながっているんだよね。」というような話を笑顔でしてくれました。...

星空を眺めたり、あるいはその存在を意識することで気持ちが外に向かうという効果は、心理的にも大きいと思っています。...これは、患者さんに限りません。付き添いのご家族も、あるいは病院のスタッフも同様だと思います。そして、たとえ患者さん自身が直接に星空を眺めることができなくても患者さんとの間で星空が話題なるだけでも素晴らしいと思います。(2007.6.23)

有本淳一(京都・塔南高校)

私をはじめ京大病院に行ったとき、小児病棟ボランティアの代表をされている方が、「今夜は星を見に来ることができても、翌日になると体調が急変していたり、検査があったりで見に来ることができないことがあるんです。退院という形で参加できないのは良いことですがね。」というようなことを話しておられたことを大変印象深く覚えています。

私も嶺重さん同様に、変に気構えずに京大病院の活動に参加しています。その場その場でできることに対してできるかぎりのことをするだけなのではないかと思っています。そして、もっと子どもたちと語り合いながら、「今夜のこの時間に話したこと」が何らかの

印象に残るような活動になればと思っています。...

今までの数回の活動の中で私の印象に残っていることをいくつか紹介します。

昨年度私は高校3年生の担任をしていて、自分のクラスの中に看護師を志す生徒がいました。この生徒たちにも京大病院での活動を紹介したところ、何名かが手伝いに来てくれました。天文のことはまるで知りませんし、子どもたちにもどう接していいのかわからないような生徒たちだったのですが、この中の1名がこの経験をきっかけに小児科の看護師を志望するようになりました。現在は看護学校で学んでいますが、将来、夢がかなうとすばらしいなと思っています。

前回の活動のときだったのですが、病院の医療スタッフの方が、わざわざ仕事を抜け出して、望遠鏡をのぞきにこられました。土星は本当に環がありますねと言いながら、感心されていました。どうやら小児病棟で、土星が見えているところが話題になったらしく、それで見にこられたそうです。

尾崎さんや犬飼さんがおっしゃるように病室の中で宇宙のことや星空のことが話題になり、数ヶ月に一度の活動だけでなく、もっと見えない部分で影響が出るとうれしいと思っています。

やはり私は教員ですからすぐに教育という部分とのつながりを考えてしまう癖があるようなのですが、このようなボランティア活動は垣根なしにもっと広くいろいろなつながりを考えていけると、いろいろと新しい取り組みへつながっていくのではないかと思っています。...ユニバーサルに考えていくと、よりよいものが見えてくるのだらうと、最近ようやくわかりかけてきたように思っています。(2007.6.23)

(文責：嶺重)